

<書 評>

『「南京事件」—日本人48人の証言』 (小学館文庫)

(英訳版) (史実を世界に発信する会)

阿羅健一著／英訳：マヤ・グローン

書評者：ハマ・タダシ (日本語訳：「史実を世界に発信する会」)

1937年12月13日、蒋介石政権の首都南京は日本軍の手に陥ちた。当時、中華民国と日本の間では宣戦布告なき戦争が進行していた。この南京攻略は、その戦争の中でも決定的な瞬間だった——「東洋鬼 (日本の蔑称)」が国民党の神聖なる首都を占領したのだ。その約一週間前、12月7日に、蒋介石は、幕僚を率いて、ひそかに南京 (および無防備の中国人市民) を見捨てて去っていた。空間と時間稼ぎをするためだった。その意図は、日本軍を広大な中国の中で、消耗戦に引きずり込むことだった。(首都警備司令部の長官に任命されていた唐生智などトップクラスの将校たちは12月12日に南京を放棄していた。残された徴用兵には自分の身は自分で守れと言い捨てて) まさしくハリウッド映画そのままだった。あわやというときに、米軍とその同盟軍が駆け付け、卑劣な日本軍の手中から、蒋介石の一行を救出するのだった。国民党の語るストーリーを聞いていると、日本軍が南京で行ったことは、1812年の米英戦争の際に、英軍がワシントンDCで行ったことと変わらなかった。つまり、組織的な略奪だった。しかし、英軍と違って、日本軍は南京に対してそのようなことをするつもりはなかった。実際、中国の支配をめぐる蒋介石と争っていた中国共産党主席毛沢東は、1938年の論文「持久戦論」で、日本軍が「五つの過ち」を犯したとして非難したが、その中には、侵略性が足りなかったために、南京市民を「皆殺し」にしなかったことが含まれていた。

南京攻略に至る出来事については、正確精密に描かれた書籍が出ている。(例えば、東中野修道「南京虐殺—事実 vs フィクション」／東京 世界出版) いわゆる「南京大虐殺」について、背景をよく理解していると、本書の読むために貢献する所大である。

作家であり、フリーランスの歴史家である阿羅健一は、南京攻略の前から陥落後まで通して此の地およびその周辺にとどまっていた日本人に面接して聞き取りを行った。面接の時点で、すでに七十代・八十代になっている目撃者が多かった。中には九十代の人もいた。しかし、概してみな、頭も体もしっかりしており、南京時代のことを思い出すのに不都合はなかった。とはいえ、読者もよくご存じのように、記憶というものは、心の傷となるような経験の記憶であっても、時とともに変形して行くものである。阿羅は、面接した目撃者の記憶が必ずしも明瞭なものではなく、混乱している例もあったと認めている。目撃者というものは、また、過去の事件が全くの捏造(「虚偽」もしくは「思い込み」)であったり歪められたりしたものであっても、それを無理矢理「思い出す」ということもあるも

のだ。阿羅の面接した目撃者の中では、東京日日新聞の鈴木二郎記者がその好例だった。鈴木は自分の記憶だけに基づいて語り、それを信じてくれと言ひ募るのだった。目撃者の証言が過去を蘇らせるのに有効であることは言うまでもないが、忘れてならないことは、頭はビデオレコーダーではなく、目撃者の証言を補強するためには、物理的な証拠が必要になるということである。阿羅が面接した目撃者の中には、南京時代の写真を持っている者もいた。しかし、その写真の中に、虐殺や「戦争犯罪」が行われたということを示唆するようなものは一つもなかった。面接を受けた目撃者は、主として日本軍人か従軍記者（特に司令部付）。事業主のような民間人は、大半が南京を去っていたようで、目撃者の中には含まれていなかった。7月に通州で約200人の日本人が虐殺されていた。これが8月に勃発した上海事変という宣戦布告なき戦争の発端だった。この報を受け、また首都警備司令部の長官だった唐生智はが11月27日に、外国人居留民に南京を去るよう要請する声明を発表していたためである。12月13日に南京が陥落した後、目撃者の一番印象に残ったことは、人間の姿が見えないことだった。兵士も民間人もいなかった。南京の壁に囲まれた「城」と呼ばれる部分では、いわゆる国際安全地帯に中国人の民間人がいるだけだった。（南京安全区国際委員会は、安全地帯に20万人の難民がいたと主張したが、阿羅の著書では、その数は2万人ないし30万人としている）面接した目撃者たちは、城内は「からっぽで静か」であり、「発砲」の音も聞こえず、「街も通りも清潔」で、「放置された死体」は見当たらなかった、と述べている。

城の内部では、記者たちは、放棄された建物を職場兼住居にしていた。12月17日、日本軍が整然と行進して入場した頃、目撃者たちは、中国人の市民が、城内の到る所で商売を始めたことに気づいた。従来公認の歴史観によると、日本人兵士が次から次へと市民を殺戮し、二箇月の間に何万人をもレイプしたことになるから、大変な違いである。

日本軍総司令官・松井石根大将は、あらかじめ現地の司令官全員に通達を送り「厳しい軍規」を維持するようにと命令していた。さらに、入城を認める兵士の数を制限していた。結局入城したのは8000人ほどだった。南京攻略に参加した部隊の大半は、12月末までに、南京を出て作戦地域へと移っていた。

目撃者全員が城内のあらゆる地域に入れたわけではなかった。日本軍の歩哨が秩序維持のために配置されていたからだった。歩哨は特に安全地帯が多かった。

（安全地帯の入り口に中国軍の警備兵がいたという証言もある）さらに、目撃者の中には、安全地帯の内部には、ゲリラや落後兵や脱走兵がいたことに気づいた者も多かった。松井司令官付だった岡田尚は、中国軍の軍服が、「町中に散らかっていた」のを見た。新愛知新聞の南正義記者は、一部焼けた日本兵の死体が2体か3体、中山東路のプラタナスの木の枝にぶら下がっているのを見たと述べている。中国人は「大虐殺」を主張するが、ゲリラの死体を民間人の死体と誤認したのではなかろうか。東京朝日新聞の足立和雄は、「数千人」（足立も確信はないと認めているが）のゲリラが南京城の内外で殺されたと示唆している。2003年のイラク侵攻の前に、独善的な国防次官補ケネス・リー・エーデルマンは、市街戦とは、簡単に勝てる戦争だと嘯いたが、実は決してそんなものではないと

いうことを忘れてはならない。軍服を着ていないテロリストの死体が数体、街頭に横たわっていたということから「戦争犯罪」と非難されるいわれはないと聞き直るのもさほど驚くべきことではない。

一般的に言って、記者というものが、虐殺物語の豊かな情報源である。「物語」と言ったのは、記者が直接に虐殺を目撃したわけでもなければ、確認をしに行ってきたわけでもないという意味である。たとえば、東京日日新聞の佐藤振寿は、「3000人の中国人俘虜」が捕まり、南京城の北西にある港町の下関で、整列させられた挙句に、重機関銃で射殺されたと聞いたとのこと。（ここはまた、中国軍の幹部が日本軍の到着前、南京から逃走する際、通過して行った町でもある）佐藤は後になって下関を訪れたが、死体は見当たらなかった。鈴木記者は、「1000以上」の死体を下関で見たと主張した。同盟通信の細波孝は、「1000人前後の中国人俘虜」が下関で焼き殺されるのを目撃したと言い張った。細波はまた、「約2万人の俘虜」が殺され、下関では「1万人弱」が殺されたという話を聞いた。細波はさらに、いわゆる「虐殺」があった時期の南京に関して、証言をしたということによく引き合いに出される同僚に言及した。しかし、細波は、その同僚が死んだことを忘れていた。読売新聞の森博は、「多数」の中国人俘虜が揚子江（おそらく下関）へ連れて行かれて射殺されたという話を聞いた。モリはまた、「河岸が死体でいっぱいになった」とも聞いた。しかし、報知新聞記者・田口利介は、自分も下関へ行ったが、「何も見なかった」と言っている。

南京城内でも「虐殺」があったという話がある。鈴木記者は、虐殺を目撃したと強硬に言い募る——日本兵は中国人俘虜を防壁から投げ落とし、生存者がいればつるはしで殺した。しかも、それが、「笑顔を浮かべ」「笑いながら」のことだったというのだ。鈴木はまた、城の光華門の所に、死体が積み重ねられていたという話を聞いた——一面に死体が転がっているので、戦車が死体を轢きながら走ったということだった。鈴木は自分が「虐殺」を目撃したと信じているようだったと阿羅は述べている。しかし、鈴木は自分がいつ城に入ったかははっきりとは覚えていない。彼はまた、二人の日本人将校が「百人斬り競争」をしたという話を実話だと信じて疑わない。しかし、彼の作ったこの物語のおかげで、この二人の将校は、終戦後、国民党によって処刑されたのだった。阿羅の面接記事を読む限りでは、鈴木はそういう結果をもたらしたことにに関して、まったく痛痒を感じていないように見える。（百人斬り競争の物語を捏造した一人である東京日日新聞の浅海一男記者は、阿羅に向かって、「あの当時のことははっきりとは覚えていない」と語った。それにもかかわらず、南京の「世紀の大虐殺」を信じているのである）

戦争のむごたらしさはさておき、記者たちは、自分たちが入城した後も、市民は通常の生活を送っていたと語っている。日本軍が華々しく行進して入城した後、たとえば読売新聞の樋口哲雄カメラマンのような記者たちは、城内の紅灯地区

（歓楽街）に頻繁に出入りしていた。樋口は入城式の後、約一箇月、南京に滞在した。樋口の知っている限りでは、日本兵は紅灯地区へ入ることは許されていなかった。その事実には、南記者も異存はなかった。樋口は質問に答えて、南京近郊に軍の「慰安所」があったかどうかは知らないと言った。日本軍の将兵が民間

の売春宿に入ること許されていなかったということは、他の箇所ですでに触れられている（秦郁彦「慰安婦と戦場の性」Lanham, MD: Rowman & Littlefield）。事実、上海派遣軍の参謀将校・大西一大尉は、兵士のための慰安所が一箇所設置されたと証言している（城内か城外かは不明）

この「虐殺」と「大量レイプ」のあったとされる時期には、兵士たちは退却する国民党軍を追って、この地域からはいなくなっていた。ところが、記者たちの中にはなお南京に留まっている者が若干名はいた。たとえば、福岡日日新聞の三苦幹之介は、南京占領の後、6年にわたってこの地で暮らし、戦後も半年間、「一万人の日本人居留民」とともに南京近郊にとどまった。彼は、南京に滞在している間、「虐殺」の話などまったく聞いたことがなかった。

阿羅が面接した兵士たちも、戦争を直接に観察しており、その話の信憑性は高い。兵士たちが目撃談を語るということは、甚だしくいやなで、道徳的・肉体的に辛い作業だった。実際、記者たちの中には、軍事的な側面を強調するものもいた——彼らは、軍からもらう食事で命をつなぎ、寒い十二月には、眠れる所でもらどこでも眠り、その一方で敵の銃撃を避けなければならなかった。本書は過去を現在に生き生きとよみがえらせる——しかし、南京で日本軍が中国人を殺す目的でわざわざ探し出したというような与太話は相手にしていない。